

「できるかもしれない」という気持ちを持って、 生徒が次の学習に向かえる学習評価の実現を目指す

北海道大学 高等教育推進機構・高等教育研究部門 名誉教授 **鈴木 誠**

富山県立南砺福野高校 **石黒佳奈** / 島根県立浜田高校 **山田伸太郎**

これからの社会を生きる上で必要な資質・能力を育むためには、学習評価はどうあるべきなのか。そして、その評価を材料に、教師は生徒にどのように働きかけていくべきなのか。学習評価に対する高校生の生の声に耳を傾けながら、2人の若手教師と、教育心理学の立場から学校改革にも携わる研究者が語り合った。

新学習指導要領は 学習評価をよりよくする好機

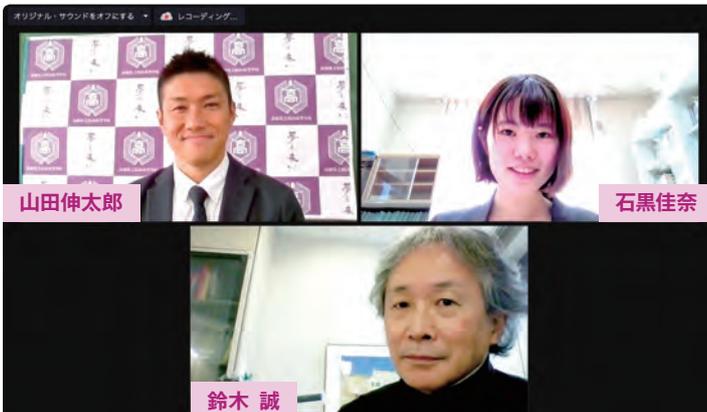
河野 新学習指導要領では、各教科において観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）が強化され、ペーパーテストだけでなく、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価など、多様な手法を用いて多面的に評価していくこととなります。高校の教壇に立つ先生方は、学習評価（以下、評価）について今、どのような興味・関心をお持ちでしょうか。
石黒 私は英語科ですが、4技能の育成の強化が図られることがきっかけとなって、ペーパーテスト以外の

評価手法に関心を持つようになりました。実際にパフォーマンス評価を行いました。生徒に評価規準を説明し、修正点をフィードバックしていく中で、スピーキング力の向上だけでなく、学習意欲の喚起にもつながったという手応えを得ました。

山田 私は探究学習に取り組んだことがきっかけで、ここ数年、評価に興味を持つようになりました。評価は、研究すると新たな発想がどんどん湧いてきてとても楽しいです。先日、同僚の先生方と探究学習のルーブリックの作成に取り組む中で、本校の探究学習で育成を目指す資質・能力の再整理を行い、それを

見取ることができるよう、評価基準のチェックリストを作りました。そういった経験が、教師の評価に対する考え方を広げるんだなと感じました。

鈴木 私も高校に勤務していた頃、定期考査の実施期間などの比較的時間に余裕のあるタイミングで、同僚に声をかけて評価のあり方を考える勉強会を開催したことがあります。新学習指導要領では、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に沿って、どのように生徒を見取り、評価していくのかを、すべての教師が考えていくことが求められています。評価





VIEW21編集部
高次領域担当責任者
河野仙一
JUN・SENICHI

鈴木 誠 北海道大学 高等教育推進機構・高等教育研究部門 名誉教授
すずき・まこと

一般企業、中学校教師、高校教師を経て、北海道大学へ。専門は、意欲（自己効力）の構造解析、フィンランドの教育課程と学習指導および教科書や入試の分析、解剖学（両棲綱無尾目）など。著書に『ボクにもできる』がやる気を引き出す』（東洋館出版社）など。



は、「何を」「どのようならいで」「どの領域を」「いつ」「誰が」「どのようツールで」という6つの観点から行っていくものです。それらの観点を踏まえて、学習活動前の「診断的評価」、学習活動中の「形成的評価」、そして学習活動終了時の「総括的評価」の3つの段階で評価を行っていくことが求められます（図1）。新学習指導要領は評価をより

よいものにする絶好のチャンスであり、評価について関心を持つ教師は増えているはずですから、山田先生のように学びのコミュニティを校内外につくっていくことが大切です。



富山県立南砺福野高校
石黒佳奈 いしぐろ・かな
教職歴4年。同校に赴任して4年目。英語科。

富山県立南砺福野高校
◎1894（明治27）年、富山県簡易農学校として発足。「学び合い、高め合おう」をスクールモットーに、「至誠 質実 剛健」を校訓に掲げる。和洋折衷2階建ての明治以降の代表的な建築「蔵浄園」は、国の重要文化財。
◎設置 1894（明治27）年
◎形態 全日制／普通科・国際科・農業環境科・福祉科／共学
◎生徒数 1学年約250人
◎2020年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、富山大、金沢大、福井大、信州大などに56人が合格。私立大は、東海大、法政大、立命館大、龍谷大、近畿大などに延べ347人が合格。
◎URL <http://www.nanrifukuno-h.ty.m.ed.jp/>

これからの社会について
生徒や保護者とともに考える

河野 大学進学希望者が多い学校も、これまでのペーパーテスト中心の評価の考え方から転換していくこ



島根県立浜田高校
山田伸太郎 やまだ・しんたろう
教職歴12年。同校に赴任して5年目。数学科。

島根県立浜田高校
◎「高い理想と誠実な努力」を教育目標に、授業、部活動、「総合的な探究の時間」を中心とした3か年のキャリア教育「HIRAKU」などの教育活動を通じて、一人ひとりの夢の発見と、その夢に向かっの挑戦を支援する。
◎設置 1893（明治26）年
◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
◎生徒数 1学年約200人
◎2020年度入試合格実績（現浪計）
公立大は、東京工業大、東京大、金沢大、神戸大、九州大などに109人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ173人が合格。
◎URL <https://www.hamakou.ed.jp/>

とが求められます。

山田 進学実績を重視すること自体が問題ではなく、進学実績をあたかも学校の教育目標であるように捉えてしまうことが問題なのだと思います。進学実績は結果の1つであると捉えることが必要であり、そのためにも、自校として育成を目指す資質・能力を、生徒や保護者の思いに加え、地域・社会の期待や要請も踏まえて設定し、校内外に明確なメッセージとして発信していくことがこれからの学校には求められると思います。

石黒 私も、地方の公立高校の教壇に立つ1人として、生徒や保護者、そして私たち教師の中に、「少しで

図1 学習評価の3つの段階

- 診断的評価** 学習者が既に理解していることを把握し、適切な学習目標を設定する
- 形成的評価** 学習活動の途中で行い、学習内容の定着や意欲の状態を測り、教師の学習指導の改善に役立てる
- 総括的評価** 1つの学習活動が終了した時に学習の成果を測る

*鈴木名誉教授への取材を基に編集部で作成。

も高い点数を取って、その点数で行ける大学に行った方がよい」という考えがあることは否定できません。その上で、未来を生きる力を生徒に育むために、私個人ができることを考えると、それは、十年後、二十年後の社会を私なりに見据えて、育成を目指す資質・能力を授業で身につけさせるべく、生徒と英語を学んでいくことだと思います。そうすることで、大学進学に対する生徒の考え方も変化してくるのではないのでしょうか。

鈴木 その学校の評価のあり方を決める土台は、学校の経営方針であり、どのような資質・能力を生徒に育むのかという教育理念です。授業がその理念の実現のために行われているのであれば、評価のあり方はおのずと変わってくるはずです。学校は、生徒や保護者に教育理念とその実現のための評価のあり方をしっかりと伝えることが求められます。また、これからの社会について考える機会を生徒や保護者に提供することも重要です。私は以前、高校生の保護者に、海外の大学の入試問題を紹介し、そこで測ろうとしている力について説明したことがあります。世界で活

躍していくためには、協働性や創造性、コミュニケーション能力といった非認知能力が重要であることを知ると、保護者は一様に驚きます。世界はどうなっているのか、これからの社会ではどんな力が求められるようになるのかを伝え、その育成のためには、どのような授業、評価が必要なのかを、生徒や保護者と話し合うことも重要でしょう。

教師のひと言の影響力の大きさを認識

河野 多様な手法による多面的な評価は、高校にも着実に広がっているようですが、課題としてはどのようなことが挙げられるのでしょうか。

鈴木 評価は、生徒の状態を値踏みするものではなく、生徒が主体的に学習に取り組み続けられるように支援するためのものであるべきだと私は考えています。しかし、実際には、評価が生徒の学びの意欲の覚醒につながっていないこともあります。

河野 先生方には、「よい影響・マインスの影響を与える教師からのアドバイス・声かけ」について生徒に尋ねたアンケート結果をご覧くださいだ

きます（P.15）。評価において、前向きになることも後ろ向きになることも多い場面は、定期考査と模擬試験だということが分かります。

山田 節目のテストは、生徒のその後の学習意欲に大きな影響を与える評価の機会なのですね。生徒のコメントを読むと、評価の場面で生徒にかけている私たち教師のひと言が彼ら・彼女らを伸ばし、そして時には傷つけているのだと、言葉の持つ力の大きさを改めて実感しました。

石黒 私も、教師のひと言の影響力を感じました。こちらが何気なく口にした言葉によって、生徒が定期考査や模擬試験などの評価の意味を、教師の想定とは違う形で捉えてしまうこともきつとあるのだろうと思います。

河野 定期考査も模擬試験も、生徒の学習を支援する上で重要な客観的評価です。しかし、同じ定期考査・模擬試験でも、生徒の意欲を引き出すこともあれば、そうならないこともあります。では、理想の評価を実現するためには、何が必要なのでしょう。

鈴木 A、B、Cといった評定だけをつける評価では、学びの意欲は引

き出せません。生徒に「なぜ、Bなのか」「どこを修正すればよいのか」といった評価の理由や今後の見通しを示し、生徒が自分の学習状況をメタ認知できることが必要です。高校では、定期考査の結果を基に評定をつけることが評価だと考える向きもありますが、評定は「総合的評価」にあたり、学習評価の1つのフェーズに過ぎません。診断的評価によって目標を明確化し、形成的評価によって学習の進め方を確認して、総合的評価の場面でも、「なぜ、この評価なのか」「どこを修正すればよいのか」を生徒に伝えることで、初めて学びの意欲を引き出すことができるのです。

「できるかもしれない」という気持ちにさせる声かけ

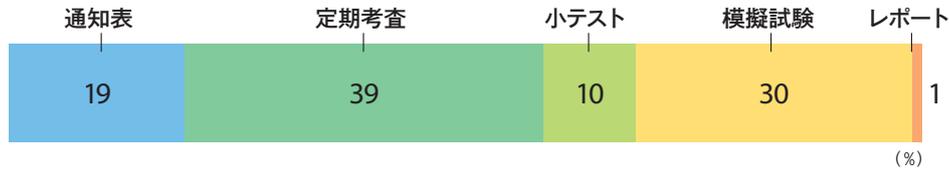
河野 「なぜ、この評価なのか」「どこを修正すればよいのか」を生徒に伝える際、教師はどのようなことに配慮すればよいのでしょうか。

鈴木 評価によって、生徒が「私もできるかもしれない」という気持ちになることが大切です。先生方は経験を通して実感していると思いま

高校生に聞いた「よい影響・マイナスの影響を与える教師からのアドバイス・声かけ」

*全国の高校生へのアンケート結果。ウェブを通じて実施し、1,321人（1年生489人、2年生531人、3年生301人）から回答を得た。

■返却された時などに先生からアドバイスをしてもらったり、声をかけてもらったりしたことで、その後の学習姿勢や学習方法に最も**よい影響を与えたもの**



先生からアドバイスをしてもらったり、声をかけてもらったりしたことの具体的な内容

- ◎自分の苦手なところと比較的できているところを確認した上で、勉強法を教えてくれた。
- ◎よくできているところを「今の調子で頑張ろう」と認めてくれた上で、できていないところについて、「この部分を伸ばすようにしよう」と言われた。
- ◎どうしたら学年上位に食い込めるのか、ミスを減らしていくにはどうすればよいのかを教えてもらった。
- ◎ミスが多かったところの解き方などを詳しくアドバイスしてくれた。
- ◎苦手な教科をどのように頑張るべきかを具体的に示してくれた。
- ◎教科担当の先生から、「あなたは質の高い家庭学習をしているから、点数がよく伸びているんですよ」と言ってもらえた。
- ◎数学で、学校指定の問題集にしっかり取り組んでテストに臨んだら、いつもより高い点数が取れた。その時、「問題集に取り組んだ成果が出たね」と褒めてもらった。

できているところをまずは認めた上で、克服すべき弱点を指摘している

苦手なことや弱点に対して具体的なアドバイスをしている

結果だけではなく、日々の学習の様子を基に褒めている

■返却された時などに先生からアドバイスをしてもらったり、声をかけてもらったりしたことで、その後の学習姿勢や学習方法に最も**マイナスの影響を与えたもの**



先生からアドバイスをしてもらったり、声をかけてもらったりしたことの具体的な内容

- ◎「こんな問題もできないのか」と言われた。
- ◎「今の志望大学は諦めた方がよいかもしれない」と言われた。
- ◎「この教科のここを直せ」とだけ言われても、直し方が分からない。
- ◎「もっと頑張れ」など、具体的ではないアドバイスもらった。
- ◎自分なりに勉強をしているつもりなのに、「勉強していない」と決めつけられた。
- ◎順位や偏差値が下がっているのに、「頑張っているね」と言われ、自分に甘くなってしまった。

頭ごなしに否定されている

具体的な行動に結びつく声かけになっていない

プロセスや結果を正確に把握していない

すが、私が考える「『できるかもしれない』という気持ちにさせる支援」のポイントをお伝えします(図2)。

まず、褒めるという言葉での支援です。褒めると言っても、ただやみくもに褒めればよいというものではありません。根拠がないのに褒めても、きつと生徒に見透かされるでしょう。褒める際には、その生徒をほかの生徒と比較するのではなく、その生徒自身の過去と比較すること、そして、小さな成長でもよいのでそれを見逃さず、具体的に、結果だけでなくプロセスにも目を向けた上で褒めることが大切です。そのようにして生徒を褒めるためには、一人ひとりの生徒の詳細なモニタリングが重要になります。そして、生徒のモニタリングにおいては、結果とプロセスが表された模擬試験などのアセスメントやポートフォリオは、有効な手段となるのです。さらに、生徒と面談を重ねるなどして、生徒自身が自分の学習状況をメタ認知できるように支援することが必要です。

石黒 私も、生徒にただ「頑張れ」というのではなく、その生徒の学習状況を把握した上で、具体的なアドバイスをできるように心がけています。その意味で、詳細なモニタリングは不可欠だと思います。ただ、その分、「あなたはこうしたらいいんじゃないかな」と、私の考えを押しつけることになっている時もあるかもしれません。もつと生徒の言葉を待つことも必要だと感じています。

鈴木 おっしゃる通り、どれだけ生徒を詳細に把握したつもりでも、その見取りが常に正しいとは限りませんし、具体的なアドバイスをしたからと言って、生徒が教師の予想通りに変化するわけではありません。そこで求められるのが、「見張る」のではなく「見守る」というスタンスへと転換した関係性での支援です。具体的なアドバイスをした上で、判断は生徒に委ね、必ずしも教師の思った通りに変化しない生徒も受容する。そして、学校行事や委員会活動など、一見、学習とは関係がなさそうな場面での成功体験も見取って褒める。教師が生徒を信じ、待つ態度を貫く中で、生徒は高校生活での様々な経験と成功体験をほかの場面にも転移できるようになります。言語での支援、関係性での支援の積み重ねが、生徒に「私にもできるかもしれない」という気持ちを育みます。

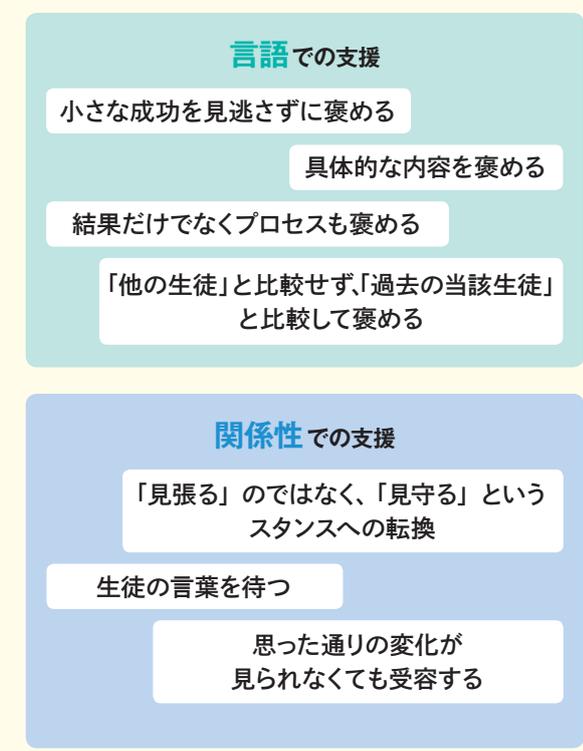
自校の「評価」をよりよく機能させるために

河野 鈴木先生は、生徒に「私にもできるかもしれない」という自信・信念を育むため、高校教師の支援を行っています。

鈴木 山形県立米沢興譲館こうじょうかん高校は、スーパーサイエンスハイスクール、事業の評価指標として、私が開発した「自己効力測定尺度」を取り入れました。自己効力とは、「私にもできるかもしれない」という自分の知識や技能への自信や信念のことであ

り、自己効力測定尺度は、自己効力を通して生徒の学習意欲を測定する尺度です(図3)。具体的には、「私はやる気になれば、理科は難しいことでも分かる」「私は集中して理科の授業を受けることができる」「私は自分の目標を決めて理科の勉強をしている」「先生は理科の勉強において私に期待していると思う」など、生徒が高校生活での目標を達成する上で物差しとなりうる30以上の項目で測定されます。同校は、自己効力を、育成を目指す資質・能力の中心に置き、生徒の自己効力の測定を

図2 「できるかもしれない」という気持ちにさせる支援



*鈴木名誉教授への取材を基に編集部で作成。

図3 自己効力測定尺度

設問番号		a01	a02	a03	a04	b01	b02	b03	b04	b05	b06	b07	b08	b09
2020/12/25 ～ 2021/1月末	ID	a01	a02	a03	a04	b01	b02	b03	b04	b05	b06	b07	b08	b09
		私はテストなどで失敗しないと決めた ら、本当に失敗しません。	私はやる気になれば、勉強は難しいこと でもわかります。	私は勉強で間違えないと決めたら、間違 えません。	私は学校で良い成績を取ろうと思えば、 良い成績を取ることができます。	私は集中して授業を受けることができま す。	勉強をすると決めたら、私はすごくがん ばることが出来ます。	その気になれば、先生の言うことをとて も注意して聞くことができます。	がんばらなくても、学校の勉強はすぐわ かります。	私はわりと頭が良いので、勉強はよくで きます。	学校の勉強なら、私はとてもよくできま す。	私はだいたい先生方に好かれていま す。	私が先生に何か聞きたいとき、いつでも 先生は答えてくれます。	私は先生に、よくがんばっているとと思わ れています。
Aさん	1	前	1	3	2	2	3	1	4	3	3	3	3	2
		後	1	2	1	3	3	3	3	1	2	2	1	4
Bさん	2	前	2	3	3	4	4	4	4	3	4	3	3	2
		後	2	2	2	2	3	3	2	2	3	3	1	2
		前	1	3	1	1	2	3	1	4	1	1	2	3

生徒の自己効力を測定するために鈴木名誉教授が開発した自己効力測定尺度の一部。統制感(自信や信念)、手段保有感(努力、能力、教師)、社会的関係性(教える役割、周囲の期待)、メタ認知(自己評価、自己制御)などから、自己効力の状況や推移を把握する。

*鈴木名誉教授提供資料を基に編集部で作成。

行っています。自己効力の育成においては、周囲からの言語での支援が大きな影響を与えます。米沢興譲館高校では、診断的評価と形成的評価の場面で生徒の自己効力を測定し、生徒との面談での声かけなどに役立っています(米沢興譲館高校の実践は、P.18～21で紹介)。

河野 学校として育成を目指す資質・能力を設定することで、進学を重視する学校でも、授業のあり方と評価観を変えることができている好例ですね。今回の座談会を通じて、これからの評価において求められる先生方のあり方が見えてきたように思います。

石黒 人は誰もが、いつでも右肩上がりで成長するわけではありません。生徒一人ひとりのことをしっかりと見て、その生徒に必要な支援をしていくことが、私たち教師には求められます。そして、教師は自分が知っている一面だけがその生徒のすべてであると捉えてはいけません、私という1人の教師の価値観だけで評価してしまわないようにしたいと思います。

鈴木 1人の教師の目だけでは生徒を一方的に捉えてしまうのではない

かという懸念を抱くのは当然です。だからこそ、「教師がまだ知らない生徒の姿」を追い求めることも大切です。私は高校で学年主任を務めた時、学年団の先生方に、担当教科以外の授業を見に行くようお願いをしました。教科が変われば生徒の様子も変わりますから、自分の知らない生徒の姿を見ることは、自分の思い込みを修正する好機になります。一人ひとりの生徒について多様な視点で語り合うような教師の連携が、今後は一層求められると思います。

山田 教師の連携によって、生徒を評価する「物差し」を複数準備してあげることが出来るのではないのでしょうか。私たち教師が、知識・技能を測る物差しはもちろん、主体的に学習に取り組む態度などの非認知能力を測る物差しを手にして生徒に向き合えば、それは生徒にとっては、「私にもできるかもしれない」という自信・信念が芽生えるチャンスが増えることにつながると思います。

鈴木 教育は種まきです。いつ、どんなふうにも芽が出るのかは、簡単には予想できないから、「私にもできるかもしれない」という自信・信念を生徒に育むことが大切なのです。